

今ノトコロの解釈と意味機能

要旨

本論では、従来のトコロの研究をふまえながら、日本語の「今ノトコロ」の意味機能について考察する。トコロは全体の中の部分を表す機能がある。それに基づき、「今ノトコロ」は、あるスケールを全体とし、「今」によって取り出した部分を全体に位置づける機能をもつ。ただし、「今」によって部分が取り出せるのは、主語（主題）の行動・状況が継続中で変化性をもつときであると考えたい。行動・状況が完結してしまい、継続性がなくなった時点で「今ノトコロ」は現れることができなくなるからである。また、「今ノトコロ」が現れるとき、肯定文と否定文とで容認可能性に差が出る場合と出ない場合がある。この現象が起こる原因は、全体のスケール設定の違いによる。「今ノトコロ」が文中に現れるとき想定するスケールは、主語の一連の行動系列という時間的スケールとなる場合と、絶対数となる場合があるのである。

言語学・応用言語学専攻

平成 15 年入学

1LT03163P 割鞘 優子

平成 19 年 1 月提出

目次

1. はじめに	1
2. トコロの基本機能	1
2.1. 寺村(1992)	1
2.1.1. 実質名詞としてのトコロ	2
2.1.2. トコロの形式化の諸型	2
2.2. 田窪・笹栗(2002)	4
2.2.1. トコロの基本的意味	4
2.2.2. アスペクト局面とトコロの機能	5
3. 「今ノトコロ」について	6
3.1. 「今ノトコロ」の基本的意味	6
3.2. 「今ノトコロ」と「今～トコロダ」	8
3.3. 「今ノトコロ」のアスペクト局面と系列	11
3.3.1. 継続動詞	11
3.3.2. 瞬間動詞	13
3.3.3. 状態動詞	14
3.3.4. 第四種の動詞	15
4. 「今ノトコロ」と肯定形・否定形	17
4.1. 肯定形・否定形ともに容認できる場合	17
4.2. 肯定形・否定形による違い	18
4.2.1. 否定形が容認できる場合	18
4.2.2. 肯定形が容認できる場合	21
5. まとめ	22
参考文献	25

はじめに

本論文では、日本語の「今ノトコロ」という表現について、トコロの基本的意味から導かれる基本機能を考察した上で、動詞による容認可能性の違いや、肯定文と否定文との容認可能性の違いについて考察していく。本論文で考察の対象とするのは、以下のような例文である。

- (1) a. 太郎は今のところ音楽を聴いている。
b. 太郎は今のところ音楽を聴いていない。
- (2) a. *私は今のところ花子が泣いていた理由を知っている。
b. 私は今のところ花子が泣いていた理由を知らない。
- (3) a. ??運動会のプログラムは今のところ決まっている。
b. 運動会のプログラムは今のところ決まっていない。

(1)は、「今のトコロ」と共に現れる動詞が肯定形でも否定形でも容認可能性に差がないものである。一方、(2)、(3)は、「今ノトコロ」と共に現れる動詞が肯定形か否定形かによって、容認可能性に差があるものである。このように、「今ノトコロ」が現れるとき、肯定文と否定文とで容認可能性に差が出る場合と出ない場合がある。このような違いがなぜ生じるのか、「今ノトコロ」の生起にどのような制限があるのかを、さまざまな例を取り上げながら論じていく。

以下、まず、第2章では、先行研究である寺村(1992)、田窪・笹栗(2002)に基づいて「トコロ」の基本的意味について述べる。第3章では、先行研究をふまえて「今ノトコロ」の基本的意味を明らかにし、他のトコロの用法との違いを比較する。そして、「今ノトコロ」がどのような動詞と共に現れるのかを考察する。第4章では、「今ノトコロ」と動詞の関係において、同じ動詞であっても肯定文の場合と否定文の場合とで容認可能性に違いが現れることについて述べる。そして、その違いの原因を考察していく。最後に、第5章では、それまでの考察に基づき、「今ノトコロ」の機能についてまとめる。

トコロの基本機能

寺村(1992)

寺村(1992)は、トコロを多角性のある形式名詞としている。そして、トコロの構文的機能の段階を大きく二つに分け、実質的な名詞としての性質を保持したまま使われる場合と、

形式化した場合（接続助詞化した場合と文末助詞化した場合）について述べている。

実質名詞としてのトコロ

トコロが実質名詞として使われている例は以下のような場合である。

- (4) a. 図書館は本を読むところです。
b. その角を曲がったところに郵便局があります。
c. 何かあったら、私のところへ来なさい。

(寺村 1992:3)

実質名詞としての用法の場合、その後の助詞を言い換えたり、「私の」を「太郎の」などに入れ替えたりしても、トコロの意味は一定である。このようなトコロの意味は、辞書に記されているように「場所」「位置」、つまり「空間」のある一点を指すといえる。また、一般に「トコロ性」のない名詞（「私、時計、本」など）の場合には「～ノトコロ」というように言葉を補わなければならないと述べている。(4c)はその例である。

さらに、トコロは次の例のように人間の性格の一部を表す場合にも使われる。

- (5) 太郎は人の悪口を言わずいつも笑っている。そこが太郎のいいところだ。

(寺村 1992:p.329,(6)に基づく)

トコロは、(4a-c)のように「空間」の一点を指す場合や、(5)のように「性格(事柄)」を指す場合、また後で見える例で「時間」の中の一点を指す場合もある。寺村(1992)は、それらを個々に分類することなく、「全体の中の一部」という共通点により説明している。すなわち、トコロという語を使って空間・時間・性格などを示すときには、そのトコロが全体の中の一点であって全体ではない。「全体の中の一部」ということは、言わば全体の情景の中のある一点にスポットライトを当てることであり、観客はそのライトの当たったところに注目するが、同時にライトの当たらない暗がりも視野に入れているであろう、と寺村(1992)は述べている。(寺村 1992:p.330)

トコロの形式化の諸型

寺村(1992)は、トコロが、その承ける形式からいえば名詞性を保持しながら、次にかかっていく形式としてはかなり制限された形で特定の構文的機能を担う場合を、前節の例とは区別して考えている。

まず、修飾部全体を包み込んで、(二を伴わず)副詞的に次へかかっていく「～(タ)

トコロ」という形がある。

- (6) a. 街で見覚えのある人とすれ違った。家に帰ってアルバムを見たところ、それは中学時代のクラスメイトであった。
b. 福岡の土産物として明太子クッキーを作ったところ、予想以上の売れ行きとなった。
(寺村 1992:p.331,(12),(13)に基づく)

この形の一般的な意味特徴は、「あることが分からないという状況の中で、それを明らかにするために～してみた。すると、どうこうということが分かった。」ということであると寺村(1992)は述べている。(寺村 1992:p.332)そしてこの形は常に過去の事象について使われるとされている。

また、トコロが様々な様々な助詞に伴われて全体として副詞的に下にかかっている場合がある。「～トコロヲ」や「～トコロニ」という形が代表的な例である。寺村(1992)は、まずトコロが「全体を視野に入れ、それを背景としてある一点にスポットライトを当てる」表現であるとし、そこでの全体は一般に「静的な状態、ないし状況としての全体」としていた。だが、人は「ある事象の進展を一つの全体として見、そのある一点に焦点を当てる」ということもできる、とも述べている。

- (7) ある郵便局に強盗が押し入った。強盗は現金十万円を盗んで逃走したが、それを郵便局長が自転車で追いかけた。そして強盗が車に乗り込もうとしたところを捕まえた。
(寺村 1992:p.332(14)に基づく)

(7)は、時間の流れの中での事象の進展を視覚化した表現であると言える。寺村(1992)は、このように、ある出来事、あるいは動作を、ある始まりがあって終わりがあるある一種のできごとの一つの過程として捉えるとき、「～トコロヲ」という表現が出てくるとしている。そしてこれは、状態的な場合の、舞台の上のスポットライトというよりは、いわば映画のフィルムのひとつコマを止めて、そこに注意を集めるというふうに近いと述べている。

また、「トコロダ」のようにトコロが「ダ」を伴って、文末助動詞化する場合もある。これも、同様に前後の文の流れ、あるいは事態・状況の中で、現在に焦点を当てるといった含みを表すのがその機能であるとされている。(「トコロダ」については本論文でも次章で扱う。)

このように、寺村(1992)は、トコロの多角性について述べている。そして、トコロの多角性は、「～ドコロカ」「コノトコロ」「トコロデ」といった成句化した点にも見出されると述べている。

田窪・笹栗(2002)

田窪・笹栗(2002)は、トコロのもつ「全体の中の部分」という関係に注目し、トコロの基本的機能を「記述の関数化」と捉え定義し、その定義によりトコロのすべての解釈が導かれるとしている。

トコロの基本的意味

トコロは、非場所名詞を場所名詞に変える機能を持った形式名詞として捉えられている。

(8) 私は東京へ行った。(田窪・笹栗 2002:12)

- (9) a. *私はドアに行った。
b. 私はドアのところに行った。(a, b ともに田窪・笹栗 2002:13)

「行く」は着点に場所を表す名詞を要求する。(8)の「東京」は内在的に「場所」としての意味素性を持ち、「行く」の着点となる。一方、(9a)の名詞「ドア」は「場所」としての意味素性をもたない。そこで、(9b)では、「行く」という行為の着点とするために「ドア」を「ノトコロ」により場所化するとされる。しかし、一方、トコロは、本来場所名詞である「東京」や身体名称としての「鼻」といった場所性を持つ名詞につくこともでき、この場合のトコロは「の部分」といった意味合いを持つ。

- (10) a. この人形のどこがとれたの。鼻のところです。(田窪・笹栗 2002:14)
b. 東京のところを塗りつぶして下さい。(田窪・笹栗 2002:15)

(10a,b)に共通するのは「全体の中の部分」という関係である。そこで、田窪・笹栗(2002)は、トコロには場所化以外に部分化と言える機能があるとし、さらに場所化は部分化の特殊な例として包摂することが可能であると述べている。これらのことから、田窪・笹栗(2002)は、トコロは、ある全体を想定し、トコロが付く記述により、記述が成り立つ要素を全体の中で部分として位置付けるとしている。そして、トコロの機能を以下のように特徴付けている。

(11) トコロの機能

トコロはある領域をとり、その領域内の値の候補から、トコロが付加した記述により値を一つ取り出す。(田窪・笹栗 2002:18)

アスペクト局面とトコロの機能

(11)をふまえ、田窪・笹栗(2002)は、アスペクト局面や場面を指定するトコロの用法についても考察している。

(12) アスペクト局面のそれぞれ:

- a. ケーキを食べる{ところ} : 食べ始め
b. ケーキを食べている{ところ} : 食べる途中
c. ケーキを食べた{ところ} : 食べ終わり

継続的な動作の構造は、動作の「始め」「終わり」と「その間」の3つの局面からなる系列とみなすことができる。「動詞の基本形」「テイル形」「タ形」にそれぞれトコロをつけるとこれらの局面を表すことができる。つまり、田窪・笹栗(2002)は、ある動作の局面の系列を領域として、その局面のうち一つを同定する機能をトコロが果たすことができるとしている。

(13) シーン・カットの選択(田窪・笹栗 2002:20)

読み始め	最中	読み終わり

また、トコロは一つの動作のアスペクト局面のような小さな局面だけでなく、芝居や映画の場面連続やシーン連続を対象領域として取ることもできる。その場合は連続した場面やシーンの一コマをスライスして取り出したようなものになると田窪・笹栗(2002)は述べている。

さらに、トコロが持つ様々な用法は、領域の選択とその領域をどのように評価して値を取り出すかに依存するとしている。そして、トコロの意味機能を(14)のように定義している。

(14) トコロの意味機能

トコロは部分を表し、それが取る記述によりその部分を全体に位置づけるというのが基本的な意味である。全体が、空間である場合には、空間の位置を表す。全体がスケールである場合には、そのスケールのなかの位置を表す。

(田窪・笹栗 2002:23)

1. 「今ノトコロ」について

以上の先行研究をふまえ、この章からは「今ノトコロ」についての考察をしていく。寺村(1992)、田窪・笹栗(2002)はいずれも、トコロは「全体の中の部分」を表すという考え方であった。この点については本論文でも異存はなく、「今ノトコロ」にもその考えが適応できると考えている。さらに、田窪・笹栗(2002)は、トコロが持つ様々な用法は、領域の選択とその領域をどのように評価して値を取り出すかに依存するとしている。そこで、トコロの用法のひとつである「今ノトコロ」について、領域の選択と評価が可能であるかを確かめた上で、領域設定の制限があるのかどうかを調べていく。

1.1. 「今ノトコロ」の基本的意味

まずは、「今ノトコロ」の基本的な意味を考えたい。(15)は「今ノトコロ」を用いたシンプルな例である。

(15) この計画は今のところ順調だ。

(15)において、「今ノトコロ」を別の語に言い換えて、比較することで見えてくる「今ノトコロ」の意味を考察してみよう。

- (16) a. この計画は順調だ。
b. この計画は今順調だ。
c. この計画は現在順調だ。
d. この計画は{今まで/これまで}のところ順調だ。

(16a-c)は、計画が順調に進んでいるという今現在の状況を表すという点で、ほぼ同じ意味を表すと考えられる。そこで、(15)と(16a-c)を比べてみる。(16a-c)も計画が順調に進んでいることを表す点は同じであるが、(15)は、それに加えて、「計画が今は順調に進んでいるが、その後は順調ではなくなるかもしれない」という状況の変化の可能性を意味的に含んでいる。また、(16d)は、(15)に最も近い言い換え表現である。「{今まで/これまで}のトコロ」と「今ノトコロ」がほぼ同じ意味であるとするならば、この場合「今ノトコロ」には「マデ」が省略されていると考えられる。ゆえに、「今ノトコロ」には過去から現在(今)までのある継続的な状況下であるというニュアンスがある。これらのことから、「今ノトコロ」は、過去から現在までの継続的な状況で、かつ、その後変化する可能性をもつ場合に用いられるようである。つまり、「今ノトコロ」が現れるとき、主語(主題)の行動・状況は、「今」の時点で常に継続中である、と本論文では考えたい。

ここで、田窪・笹栗(2002)によるトコロの意味機能の定義((11)および(14))を振り返り、「今ノトコロ」の領域選択について考えてみよう。「今」という語は、時間・状況において使われる語なので、「今」という記述があることにより、「今ノトコロ」がとる領域全体は、空間ではなく常にスケールとなる、と考えられる。

以上により、「今ノトコロ」の意味機能を以下のようにまとめる。

(17) 「今ノトコロ」の意味機能のまとめ

「今ノトコロ」は、あるスケールを全体とし、「今」によって取り出した部分を全体に位置づける。ただし、「今」によって部分が取り出せるのは、主語(主題)の行動・状況が継続中で変化性をもつときである。

主語の行動が常に継続中でなければならぬ点について、以下の例文を見てほしい。

- (18) a. *バスは今のところ発車している。
b. バスは今のところ発車していない。

(18)を見てわかるように、この場合の主語「バス」は、発車していない状態から発車する状態へ変化するという状況にある。このとき、(18b)のように、発車していない状態の場合は、バスの置かれた状況は発車するという状態へ向かって継続中であるので、「今ノトコロ」の「今」によって、その状況を示すことができる。一方、(18a)は、すでに発車してしまったので、発車していない状態から発車する状態へ変化するという状況が終わってしまった。このように、時間軸上で想定されるある一定の状況が終わってしまった場合、それ以後の時間を「今」として取り出すことができなると考えられる。

ただし、このバスの状況を説明する以下のような文は容認できる。

- (19) バスは今のところ表参道を走っている。

この場合、主語「バス」の置かれた状況は、先ほどの、発車していない状態から発車する状態へ変化するという状況ではなく、発車していない状態から目的地まで進むという状況であると考えられる。ゆえに、目的地に着くまでは、バスの状況は継続中となる。目的地に着いてしまったら、先ほどと同様にそれ以後の時間を「今」として取り出すことができなくなると考えたい。このような、状況、つまりスケールの設定については、次節以降でさらに詳しく考察していく。

1.2. 「今ノトコロ」と「今～トコロダ」

この節では、「今ノトコロ」と他の「トコロ」の用法を比較しながら、「今ノトコロ」の解釈についてさらに明らかにしていく。ここでは、「今」という語を含む類似表現「今～トコロダ」と比較をし、「今ノトコロ」とどの点が異なっているのか、その違いの原因は何かを、主にスケール設定の違いと状況の変化性の点から考察していく。まずは次の例を見てほしい。

(20) 「今のトコロ」

- a. *太郎は今のところ本を読む。 : 始め
- b. 太郎は今のところ本を読んでいる。 : 途中
- c. *太郎は今のところ本を読んだ。 : 終わり

(21) 「今～トコロダ」

- a. 太郎は今本を読むところだ。 : 始め
- b. 太郎は今本を読んでいるところだ。 : 途中
- c. 太郎は今本を読んだところだ。 : 終わり

(20)を見てわかるように、「今ノトコロ」は継続動詞においては、動作途中「V-テイル」の形でしか現れない。(「今ノトコロ」と継続動詞の関係については次節 3.3.1.で詳しく述べる。)一方、類似表現「今～トコロダ」は継続動詞の動作のアスペクト局面(始め:途中:終わり)のいずれにも後続することができる。そこで、同じアスペクト局面である(20b)と(21b)を比較してみよう。両方とも、今本を読んでいる状態を表すという点で同じ意味であると考えられるが、ニュアンスの違いがあるように感じる。その違いはどこから来ているのだろうか。さらにわかりやすい状況を例にしてその違いについて考察する。

- (22) a. A: 今何をしてるの。
B: 今テレビを見ているところだよ。
- b. A: 今何をしてるの。
B: 今のところテレビを見ているよ。

この場合、どちらのBの文も、「今」の状況を語っていることに変わりはない。この文が全く同じ意味に解釈できるとした場合、(22a,b)のBの文はともに次のようなスケールをとっていると考えられる。

(23) 主語の動作系列

見始め	見ている最中	見終わり
		時間

しかし実際には(22a,b)のBの文の間にはニュアンスの違いが見られる。この違いは、(22a,b)のBの文のスケール設定がそれぞれ異なっているからであると考えられる。(22b)のBの方は、以下のようなスケール設定になっていると考えたい。

(24) (22b)のBのスケール設定

a. 主語の行動系列		
見ていない	見ている	見ていない
		時間
b. 主語の行動系列		
夕食を食べる	テレビを見る	風呂に入る
		時間

(22b)のBにおける主語の行動系列は上のいずれかであると考え、全体のスケールの違いから、(22a,b)のBの文はそれぞれ、「今」に対する全体の設定が異なっていることがわかる。(22a)のBの文は、(24)のようなスケール設定だと考えることも可能である。しかし、Aの問いに対して答える場合、通常は(23)のようなスケールを想定すると考えられる。一方、(22b)のBの文は、(23)のようなスケール設定よりも、通常(24)のようなスケールを想定した方が容認可能性が高いと考える。

ここで、田窪・笹栗(2002)は、「トコロダ」についての研究の中で、スケールを伴う繋辞文は、「Aは{いま・そのとき}B」という構文をとり、それぞれの要素は、次の性質を持つと述べており、以下のように定義している。

(25)

< A: スケールをなす値の領域を表す表現、{}: 評価時点、B: 値を選ぶ表現 >
 < A: 私は、{いま}、B: 本を読んでいるところ >

方向を持ったスケールとそのスケール上での現在の位置というスキーマの存在が

トコロによって喚起される。そしてトコロダは、主語（あるいは主題）を領域として、その領域の位置を表す。領域がスケール（方向性のある系列）を表す場合は、スケール上の現在あるいは評価時点の値を表す。（田窪・笹栗 2002:27）

この考え方は「今ノトコロ」にも適用することができる。「今ノトコロ」の場合、< A: {いま}、B: V-テイル > となる。よって、構文上の要素としては、「今～トコロダ」と変わりはない。しかし「今～トコロダ」は、トコロが文末助動詞化している用法であるが、「今ノトコロ」は「今+ノ+トコロ」により、トコロが時を表す副詞的な機能を持っていると考えられる。その違いにより、スケール設定の違いが現れるようである。

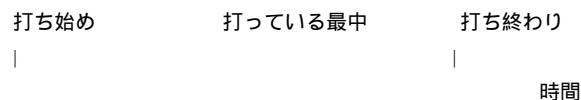
次の例文のペアは一見同じような文だが、解釈が異なっている。

- (26) a. 今イチローがヒットを打ったところだ。
 b. 今のところイチローがヒットを打っている。

(26a,b)はともに、「イチローがヒットを打った」という事実の点では同じである。しかし、両者は想定されるスケールが異なっている。(26a)の主語の動作系列は次のようになる。

(27) (26a)の場合

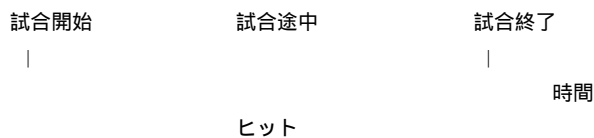
イチロー（の動作系列）



(26a)は、「今」によって「打つ」という一動作のアスペクト局面のうち「終わり」の部分を取り出している。しかし、(26b)は(27)の系列上の「打っている最中」を取り出しているわけではない。そこで(26b)の場合は、次のようなスケールを想定していると考えられる。

(28) (26b)の場合

野球の試合（の状況）



上の図を見てわかるように、この場合、主語であるイチローの動作系列ではなく、主題である野球の試合状況の系列がスケールとなっている。

このように、「今ノトコロ」は、「今～トコロダ」と比べてわかるように、主語の一動作のアスペクト局面の系列をスケールとして設定することはほとんどなく、一般的に主語の一連の行動系列や主語（主題）の状況の系列といった、より広い時間のスケールを想定することが多い。¹

なぜ「今ノトコロ」が主語の一動作のみを表すときには使われないのかについては、以下の例文を見てほしい。

- (29) a. 卵割り機が今卵を割っているところだ。
 b. ??卵割り機が今のところ卵を割っている。

例えば、二十四時間稼働し続ける機械があったとして、その機械の「今」の様子を表す文としては、(29a)のように言うことができる。しかし、(29b)のように「今ノトコロ」を使って表現することはない。そこで、「今ノトコロ」に含まれる変化性の部分に注目したい。この機械の場合、卵を割るという動作を常に継続中ではあるが、半永久的にこの動作のみを続けているだけで、その後、割るのを止めたり、別の動きを始めたりするという変化の可能性が全くない。このように、「今ノトコロ」が現れるとき、予想されるその全体の背景には、一動作だけではなく、「今」以降に転じる複数の状況を必要とするのである。これらをふまえ、「今ノトコロ」のさまざまな現れ方について次節以降で考察していく。

1.3. 「今ノトコロ」のアスペクト局面と系列

「今ノトコロ」はどのような動詞と共起することが可能なだろうか。(17)で、「今」によって部分が取り出せるのは、主語（主題）の行動・状況が継続中で変化性をもつときである、とした。これをふまえて、金田一(1976)による動詞の四分類について例文を挙げ、考察してみる。そしてさらに、(17)における、「あるスケール」とはどのようなものかを考えていく。

1.3.1. 継続動詞

まずは、「今ノトコロ」と継続動詞の関係について見てみよう。

¹ 「トコロダ」も、主語の一動作のアスペクト局面の系列だけに限らず、主語の一連の行動系列をスケールとして設定することも可能である。「トコロダ」は両方の場合に使えるが、「今ノトコロ」はアスペクト局面の系列に対しては使わない。

(30) 継続動詞

- a. 花子は今のところ本を読んでいる。
- b. 母は今のところ祖父に手紙を書いている。
- c. 太郎は今のところ夕食を食べている。

(30a-c)より、「今ノトコロ」は継続動詞と共起できることがわかる。継続動詞は継続的な状況を表す、つまり、「今」によって継続中の状態を取り出すことが可能なので、共起することができると考えられる。ここで、継続動詞のもつアスペクト局面を見てみよう。

- (31) a. *太郎は今のところ本を読む。 : 始め
 b. 太郎は今のところ本を読んでいる。 : 途中
 c. *太郎は今のところ本を読んだ。 : 終わり

(31)を見てわかるように、「今ノトコロ」が継続動詞と共に現れるときの動詞の形は、動作途中「V-テイル」となる。しかし、前節で少し触れたように、「今ノトコロ」が文中に現れるとき、想定されるスケールは一動作（例：読む）のアスペクト局面の系列というわけではない。「今」によって取り出せる部分は、動作が継続中のとき、つまり、動作の途中（V-テイル）のとき、であることには間違いないが、一動作のアスペクト局面よりも、さらに広い時間的スケールを想定する。「今」によって取り出す部分の関係を、(31b)を例にして図に示すと次ようになる。

(32) (31b)の場合

太郎（の行動系列）

読んでいない 読んでいる 読んでいない

|

時間

今

(32)は、主語「太郎」の行動に注目してスケール設定をしている。太郎が本を読むという行動において、「読んでいる」状態と「読んでいない」状態を続けていると考え、太郎の行動自体は継続中で、さらに状況の変化性もあるので、「今ノトコロ」が現れることができる。

1.3.2. 瞬間動詞

次に、「今ノトコロ」と瞬間動詞の関係について見てみよう。

(33) 瞬間動詞

- a. ランプは今のところ消えている。
- b. 競技日程は今のところ決まっている。
- c. *太郎は今のところ死んでいる。

(34) この回線は今のところ死んでいる。

(33a-c)を見ると、瞬間動詞については、共起できる場合とできない場合があることが分かる。まずは(33a,b)のように容認できる場合を考えてみる。

ここでは、(33a)を例に見てみよう。(35)は、主語（ランプ）の動作系列を「消える」という動作のアスペクト局面（始め・最中・終わり）で示した図である。

(35) (33a)の場合 案

「ランプ」（の動作系列）

消え始め 消えている最中 消え終わり

|

時間

瞬間動詞は、動作のアスペクト局面が取り出しにくい動詞なので、(35)のような系列をスケールとして設定すると、容認可能性が低くなる。しかし、(33a)は容認可能であるので、(35)とは異なるスケールを想定していると考えられる。そこで、(33a)の主語の行動系列は、以下のように表されると考えたい。

(36) (33a)の場合 案

「ランプ」（の行動系列）

消える 点く 消える

|

時間

(36)のように、スケールはランプが消える・点くといった一連の方向性をもった系列であるとする、「今ノトコロ」によって、そのスケールの中の位置を取り出すことができる。

よって、(33a,b)は、(36)のような一連の方向性をもった系列を想定することで容認できるのである。

(35)のようなスケール設定をした場合、「今」によって、動作途中のアスペクト局面を取り出す間もなく瞬間的に動作が完了してしまう。「今」によって部分が取り出せるのは、主語(主題)の動作・状況が継続中のときである必要があるため、完了してしまった動作の場合、「今ノトコロ」が現れることができない。一方、(36)では、主語(ランプ)の一動作の系列ではなく、複数の動作が連続した系列をスケールに設定している。つまり、一動作よりも、より広い時間のスケールでとらえると、主語の一連の行動系列がスケールとして設定できる。この場合、主語が行動不能にならない限り半永久的に動作・状況は継続中の状態であるので、「今ノトコロ」の出現が可能である。逆に、例えば、消えてしまって二度と点くことのないランプ、つまり、主語が行動不能になった場合は、その時点で「今ノトコロ」が容認できない文になる。

このように考えると、(33c)の動詞「死ぬ」のように、動作が完了し、主語が行動不能になった場合は、「今ノトコロ」が現れることができないことになる。(34)のような比喻表現や特異な状況等によっては、一度死んでしまっても生き返る可能性があり、主語の行動が継続しているととらえることができるため、容認できる場合がある。

このように、「今ノトコロ」が瞬間動詞と共起できるとき、「今」によって取り出される部分に対する全体のスケールは、主語の一連の行動系列であると考えられる。

1.3.3. 状態動詞

では次に、「今ノトコロ」と状態動詞の関係について考察してみよう。

(37) 状態動詞

- a. 容疑者は今のところあの建物内にいる。
- b. テマパークの完成には今のところ多大な時間を要する。
- c. 決勝への進出枠は今のところ3つある。

状態動詞は、動詞ではあるが動作そのものが考えられず、単なるもとの状態を表すものである。瞬間動詞の場合には、全体のスケールを主語の一連の行動系列ととらえることで「今ノトコロ」の容認を可能にしていた。しかし、状態動詞の場合、動作そのものについて考えることが難しい。ゆえに、主語の行動を考えるのではなく、動詞で表されるその状況について想定し、主語(主題)の状況が継続中で完結していない場合、「今」によって部分を取り出すことができると考えられる。ここで(37b)の系列を例に見てみよう。

(38) (37b)の場合

テマパークの完成(の状況)		要しない	
(時間を)要する			
0	50	100	完成度(%)

このように(38)の全体のスケールは、「テマパークの完成」という主語から、その完成度(もしくは、完成までの時間)という絶対数で考えられる。「今ノトコロ」によって取り出される部分は、この場合、完成度(x)0 $x < 100$ の間ということになる。100%に達した時点で、状況の継続性がなくなってしまうので、100%のときは「今ノトコロ」は現れることができない。(37c)も同様に、「決勝への進出枠」という主語から、スケールはその進出枠の絶対数ということになる。

1.3.4. 第四種の動詞

最後に、第四種の動詞について考えてみたい。

(39) 第四種の動詞

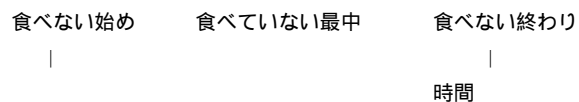
- a. *花子は今のところ母親に似ている。
- b. *太郎の部屋は今のところ南に面している。
- c. ??太郎の作品が今のところ優れている。
- d. 花子の演技は今のところずばぬけている。

(40) 太郎の作品が今のところ一番優れている。

第四種の動詞は、文末では「V-テイル」の形で現れることが多いが、継続動詞とは扱いが異なる。状態動詞と同様、動作途中が取り出しにくい動詞である。ゆえに、第四種の動詞も、動作そのものを考えることが難しい。また、主語の状況としても変化性に乏しい状態を表すため、(39a,b)のように、通常「今ノトコロ」と共起できないことが多い。だが、語を補足することで容認可能性が上がることもある。(39c)は、全体のスケールが想定しにくく、「今」によって取り出される部分が明確ではないため、このままではやや容認可能性が低い。しかし、(40)のように、「一番」という語を補うと、全体のスケールが想定しやすくなり、容認可能性が上がる。その場合、全体のスケール設定は以下の図のように考えられる。

(48) (44b)の場合

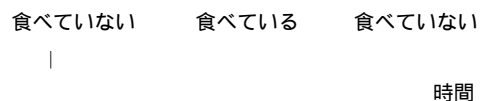
「太郎」(の動作系列)



ここで、少し気になるのが(47)の図である。主語の動作系列としては間違っていないが、実際の動作としては、「食べていない」状態が続いているだけなので、どのアスペクト局面を取り出しても状態は同じである。そこで、前節まででも見たように、(44)を一動作のアスペクト局面の系列よりも広い時間的スケールとしてとらえ、肯定文と否定文を合わせて考えてみる。その場合、スケールは主語の一連の行動系列になり、次の図のように示される。

(49) (44a,b)の場合

太郎(の行動系列)



この場合、太郎の「食べる」という一動作のアスペクト局面の系列に限らず、太郎の一連の行動系列としてとらえることで、肯定形・否定形を同じ系列上で考えることが可能になる。

(44)~(46)の例では、肯定・否定の状況が繰り返し続く可能性があるので、主語の状況は継続中で変化性もある。よって、「今ノトコロ」と共起するとき、肯定表現としても否定表現としても部分を取り出すことができる。ゆえに、肯定文・否定文ともに容認可能性が高いのである。

2.2. 肯定形・否定形による違い

2.2.1. 否定形が容認できる場合

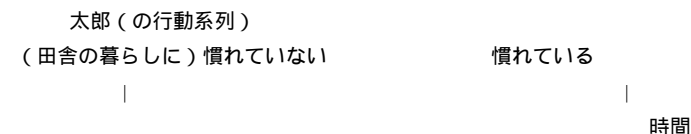
では、次に肯定文・否定文で容認可能性に違いが現れる文について見てみよう。

- (50) a. ??太郎は今のところ田舎の暮らしに慣れている。
b. 太郎は今のところ田舎の暮らしに慣れていない。

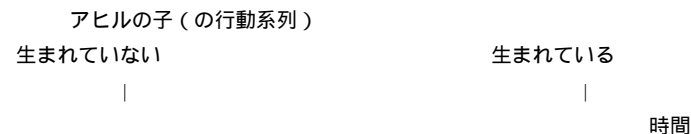
- (51) a. ??アヒルの子は今のところ生まれている。
b. アヒルの子は今のところ生まれていない。

これらは、肯定文は容認可能性が低く、否定文は容認可能性が高い例である。このように容認可能性に違いが現れる原因について、スケール設定をもとに考えてみる。以下に(50)、(51)における主語の行動系列を示す。

(52) (50)の場合



(53) (51)の場合



ここでわかるのは、各スケールともに、否定の状態から肯定の状態への行動系列になっているということである。そして、この場合、肯定の状態になった瞬間に主語の行動は継続性・変化性がなくなってしまうので、肯定の状態は「今」によって取り出すことができない。ゆえに、このタイプの系列をスケールとして設定した場合、「今ノトコロ」によって取り出すことができる位置は、通常、否定の状態ということになるのである。

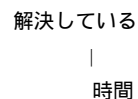
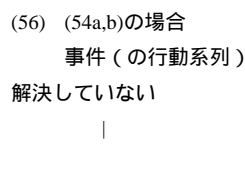
しかし、通常は肯定文・否定文のどちらか一方しか容認できない動詞の場合でも、文を補足することで容認可能性が上がることもある。以下にその例を挙げる。

- (54) a. ??この事件は今のところ解決している。
b. この事件は今のところ解決していない。

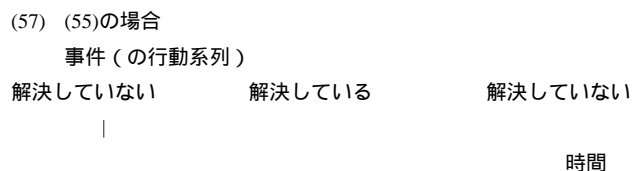
(55) この事件は今のところ解決している。しかし真犯人は別にいるはずだ。

(54)で想定されるスケールは通常、否定形から肯定形への一方向的な主語の行動系列である。よって、肯定文である(54a)は容認可能性が低く、否定文である(54b)は容認可能性が高

い。ここで、(54a,b)のスケール設定と主語の行動系列を図で示して見てみよう。



一方で、(55)のように文を補うと容認可能性が高くなることがある。その理由は、(56)とはスケール設定が異なっているからである。(55)の主語の行動系列は以下のように考えられる。



(55)では、「真犯人は別にいるはずだ」という文から、そう考えている本人にとっては、まだ、「解決していない」という否定の状態へ転じる可能性がある状況が続いている。よって、主語（事件）の行動（状況）は、依然として継続中の状態であるため、「今ノトコロ」が現れることができる。

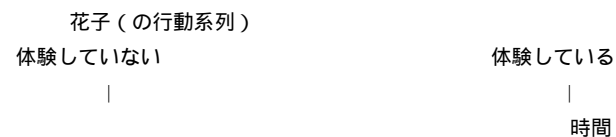
また、補足によって肯定文・否定文ともに容認可能性が高くなる文には次のような例もある。

- (58) a. ??花子は今のところスカイダイビングを体験している。
b. 花子は今のところスカイダイビングを体験していない。

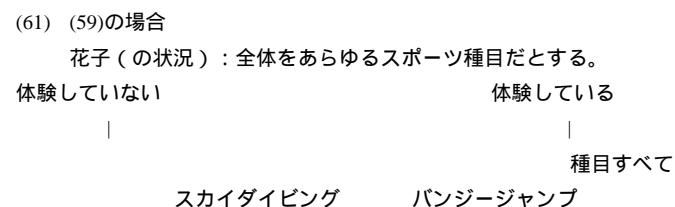
(59) 花子は今のところスカイダイビングを体験している。しかしバンジージャンプはまだ体験していない。

(58)において、スケール設定と主語の行動系列は、通常、次のような図で示すことができる。

(60) (58a,b)の場合



一方、(59)のように、文の補足により「今ノトコロ」が容認できる場合、先ほどと同様、(60)とは異なる次のようなスケール設定となる。



(60)は、花子がスカイダイビングを体験しているか、していないか、という主語（花子）の行動系列をスケールとしている。それに対して、(61)は、スポーツ種目すべての絶対数を全体のスケールとしている。

2.2.2. 肯定形が容認できる場合

では、逆に、肯定文は容認可能性が高く、否定文は容認可能性が低い例を見てみよう。

- (62) a. 花子はケーキを食べたいが、今のところ我慢している。
b. *花子はケーキを食べたいが、今のところ我慢していない。

- (63) a. 警官隊は今のところ建物の前で待機している。
b. *警官隊は今のところ建物の前で待機していない。

(62)における主語の行動系列を図で表すと次のようになる。

(64) (62)の場合

花子 (の行動系列)

我慢している

|

我慢していない

|

時間

この場合、先ほどとは逆に、否定の状態から肯定の状態への行動系列になっていることがわかる。同様に考えると、このタイプの系列をスケールとして設定した場合、否定の状態になった瞬間に主語の行動系列には継続性がなくなってしまうので、否定の状態は「今」によって取り出すことができない。ゆえに、このタイプの系列をスケールとして設定した場合は、「今ノトコロ」によって取り出すことができる位置が、通常、肯定の状態ということになるのである。また、(62)の場合、否定の状態では、「我慢する」という動作は終わってしまい、別の動作に切り替わっている、つまり、既にケーキを「食べる」という行為がなされていることが予測される。

このように肯定文・否定文のどちらか一方しか容認できない場合、肯定状態から否定状態、もしくは、否定状態から肯定状態への一方向的な主語の行動系列をスケールとして設定している。よって、肯定文・否定文の容認可能性の違いは、「今ノトコロ」を含む文のスケールをどのようなものだと想定するか、また、主語の行動系列の方向性（肯定状態から否定状態、否定状態から肯定状態）の違いによって現れる。

3. まとめ

本論文では「今ノトコロ」の特性について考察してきた。「今ノトコロ」は「トコロ」の基本機能を維持しつつ、他の「トコロ」の用法とは異なる意味付けを行うものである。その違いの一番の原因となるものは、主語や主題から想定されるスケール設定の違いである。「今ノトコロ」の動詞との関係や肯定文・否定文での容認可能性の差についても、想定するスケールの違いにより説明することができる。

結論としては次のようになる。まず、「トコロ」は部分を表し、それが取る記述によってその部分を全体に位置づけるものである。「今ノトコロ」においては、「今」という語によって、全体は方向性を持ったスケールとなる。よって、「今ノトコロ」は、あるスケールを全体とし、「今」によって取り出した部分を全体に位置づけるのである。ただし、「今」によって部分が取り出せるのは、主語（主題）の行動・状況が継続中で変化性をもつときである。行動・状況が完結してしまい、継続性がなくなった時点で「今ノトコロ」は現れることができなくなるからである。さらに、行動・状況が変化性をもたない場合は、通常「今ノトコロ」を使うことがない。また、「今ノトコロ」が現れる文で想定されるス

ケールは、主語の一連の行動系列という時間的スケールとなる場合と、絶対数となる場合がある。主語の一連の行動系列とは、動作の肯定・否定状態の連続（または各状態への一方向的なもの）や複数の動作の連続が考えられる。絶対数とは、主語の置かれた状況や文中の具体的な数量表現から想定される全体の数値である。ただし、絶対数をスケールとして設定する場合でも、状況の継続性・変化性が維持されているときにしか「今ノトコロ」を使うことはできない。

謝辞

本論文の執筆に当たり、担当教官の上山あゆみ先生には、ご多忙の中、丁寧なご指導をしていただきました。ここに厚く感謝の意を表します。また、貴重なアドバイスをいただきました九州大学大学院生の田中大輝氏をはじめ、ご協力いただいた九州大学言語学研究室の皆様により感謝いたします。

参考文献

- 金田一春彦(1976)「国語動詞の一分類」『日本語動詞のAspect』pp.5-26, むぎ書房
- 田窪行則(1993)「談話管理理論による日本語の反事実条件文」、益岡隆志(編)『日本語の条件表現』pp.169-183, くろしお出版
- 田窪行則・笹栗淳子(2002)「日本語条件文と認知的マッピング」、大堀壽夫(編)『認知言語学：カテゴリー化』pp.135-161, 東京大学出版会
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 第 巻』くろしお出版
- 寺村秀夫(1992a)「トコロ」の意味と機能」『寺村秀夫論文集 - 日本語文法編 - 』pp.321-336, くろしお出版
- 寺村秀夫(1992b)「連体修飾のシンタクスと意味」『寺村秀夫論文集 - 日本語文法編 - 』pp.313-317, くろしお出版